

次の日曜日、「松山ロシア物語」の第二回が海南新報に載った。

私の依頼をこころよく引き受けてくれたカザノフ氏は、旧ロシア内務省にあった秘密警察組織オフラーナ（旧ソ連KGB）の機密文書を丹念に調査し、一九〇六年（明治三十九）の夏に、ペテルブルクの国家警察がオフラーナに宛てた特別報告書のなかに社会革命党（エスエル）と手を組んでいた日本のモスクワ駐在武官の氏名が、ソローキンと共に記されているのを発見したのであった。文書は次のようになっていた。

「露日戦争の最中、日本のモスクワ公使館附武官明石元二郎大佐は、通常戦時国際法で許容される範囲を大きく逸脱した謀略工作を行なった。明石工作の中心はロシア国内の革命分子への財政援助である。なかでもエスエルと明石は最も密接な関わりをもちつづけていた。シベリア鉄道破壊工作、満州におけるポーランド将兵反乱作戦の二つはエスエルをとおして明石資金が動いた明らかな証拠がある。

明石は日露開戦直後にモスクワを離れ、ストックホルムへ活動の拠点を移した。この前後から、明石は日本政府が旅順の情報入手しようとやっきになっていることをエスエル側に伝え、情報提供者を募っていたところ、旅順港口内に停泊中の軍艦「ボルタワ」に乗船していた同志の名前をエスエル側は明石に伝えた。この同志は、アレキセイエフ・ソローキンという。開戦後日本政府は明石からソローキンの紹介を受けていたものと推定される。なお記録によればソローキンは開戦の年の一九〇四年十月、日本の松山の捕虜収容所で病没している。

明石工作は対戦相手の国の一将校が、わがロシアの心臓部へ入りこみ、不穏分子を取り込んで一撃を加えんとしたもので、戦況に与えた影響は少なからざるものがある」

この報告書に出てくる明石元二郎は一八六四年（元治元）、福岡藩に生まれ、陸軍大学を出てドイツに留学した。留学中に日清戦争が勃発し出征。その後ヨーロッパ各国へ駐在し、日露戦争のときは情報将校として活躍している。

参謀本部の明石に対する評価は高かった。陸軍は明石工作に当時、百万円の大金を投じている。百万円というのは、明治と今日の国の予算規模で比較すると、およそ千二百億円という巨額になる。これだけの莫大な金が、ロシアの後方攪乱のためにばらまかれたので



挿絵 (N. Takeda)

ある。そしてその成果は、陸軍参謀本部総長の山県有朋をして「明石というのは恐ろしい男だ」といわしめているほどであった。

また、ドイツの皇帝は明石工作が明らかになって「明石一人で大山満州軍二十万に匹敵する戦果をあげた」と驚愕している。

またこの報告書にある旅順のことであるが、要塞や砲台の位置、市街地の状況、港口の形状や停泊している戦艦の数と種類など、旅順攻略に不可欠の情報が参謀本部にはまったくはまらない状態であった。日露開戦からしばらくの間、参謀本部には日清戦争当時製作した旅順の古地図しかなかったといわれている。

したがって、国家警察の報告書のとおりだとすれば、エスエルを通じて明石が入手したソローキンの情報はただちに日本の参謀本部へ送られ、旅順港口内の軍艦「ボルタワ」に乗り組んでいたソローキン獲得のために謀略がねられた、と思われる。

日露戦争に詳しいアメリカの某政治学者は、海軍や乃木希典の率いる第三軍の海と山からの旅順攻撃を可能にしたのは、旅順から日本へ渡ったスパイによる情報の提供があったからだと指摘している。

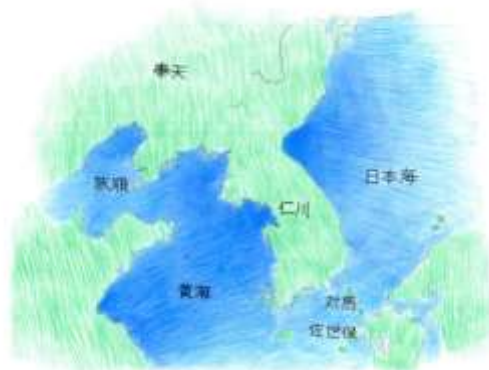
ここでもう一度、カザノフ氏から伝えられたソローキンの略歴のさわりの部分をふりかえってみる。

「ソローキンは一九〇四年六月四日深夜、極秘の命令を受け日本の連合艦隊が包囲する旅順港を運送船で脱出しウラジオストックへ向かったが、巡洋艦八雲に捕らえられた」

この六月四日は、第三軍司令官となった乃木希典將軍と軍司令部の一行が大連の東部の^{えんたいおう}塩大澳へ上陸した日である。

これより先の五月二十五日に第二軍は南山を占領し、翌二十六日、東郷連合艦隊司令長官は、大本營の命令により旅順港口封鎖宣言を発表した。中立国の船舶も含め、旅順への一切の船の出入りが禁止された。さらに三十日には大連が第二軍によって占領され、日本軍が旅順へ刻一刻と迫ってきていた。

そこで、旅順港にいたロシア太平洋艦隊はウラジオストックの艦隊へ合流しようと旅順脱出を企てることになる。このころ、旅順にいた市民もタンカー（中国式帆船）で脱出する者が多かった。ロシア側の密命を受けたソローキンがこれらの船にまぎれてウラジオストックへ行こうとしたことは十分に考えられる。ただ、かれの乗



挿絵 (Y. Takahashi)

った運送船の動きは逐一連合艦隊側に把握されており、ソローキンはまんまと日本側の手におちることになった。ソローキンは捕虜として、他の乗組員と同じように松山に送られた。収容場所は将校が多く収容された祥宗寺である。

九十年後の今日、何の偶然かその祥宗寺の壁にロシアの娘の絵が描かれているのが見つかった。だれが描いたのだろうか。私にはこの絵の発見が単なる偶然とは思えない。私はこの娘を「ナターシャ」と名付け、彼女が私たちに語りかけてくれる日をいまかいまかと待っているのである。

ところで、松山収容所で暮らすようになったソローキンにどのような運命が待っていたのだろうか。まだ確たる物証はないが、「殉庵日記」を元に、私は次のようにこの逃亡事件を推理している。

明治三十七年六月十四日、松山女学校（現在のミッション・スクール）の女学生たち十数名が祥宗寺を訪れロシア将兵を慰問し、ハンドベルを演奏した。女学生たちを引率したのは「武田ゆい」という英語の教師である。この日は、あいにくロシア語の通弁が不在だったため、ゆいが英語で通訳したが、将校には英語を解する者も何人かいて、英語からロシア語に再び通訳することで慰問の目的は十分に達せられた、と殉庵は書いている。また、この女学生たちの慰問は海南新報にも報じられているが、このほど、ミッション・スクールでもこの関係の資料が見つかった。



この六月十四日はソローキンが明治政府の手に落ちて十日後のことである。したがって女学生たちが祥宗寺を慰問したときに、かれはすでにこの寺に収容されていたはずであった。

日記を読みながら私にはピンとくるものがあった。

私はソローキンが逃亡した七月十九日の日記を開けた。ノートいっぱいドイツ語である。さらにページをくり、今度はソローキンが死亡したとされる十月十日を開けた。思ったとおりであった。この日もドイツ語がびっしり書き込まれているのである。やがて私は両日ともに共通して出てくる二人の人名を確認することができた。それはソローキンとそして武田ゆいである。

ハンドベルの音色をロシア将兵に聴かせるため女学生たちを引率した武田ゆいは、松山女学校の第八期の卒業生で母校の初代の女性教師だった。英語は神戸の女学院に学んでいるから当時としては大変な才媛であったと思われる。

学園の図書館でゆいの在職期間を調べてみた。

その期間は明治三十三年四月から三十七年七月である。

「学園史」の職員一覧には年度途中で退職したゆいの退職理由やその後の消息

は記されていない。が、それは「殉庵日記」を丹念に読んでいくなかで明らかになっていった。

以下に私はソローキンの逃亡に至るまでのいきさつを「殉庵日記」を下敷きにしながら紹介していくことにしたい。

日露戦争が始まって約二ヵ月後の五月三日の夕刻、高野殉庵所長は陸軍参謀次長田村越太郎と所長室で密談していた。

田村の来松は二日前の機密電報で高野へ通知されていたが、この時期に陸軍首脳部の一人が直々に俘虜収容所を訪ねる意図がつかめず、人払いをした部屋で田村と向かいあった高野はがくがくと膝が震えるのを禁じえなかった。

田村は敵国ロシア国内の革命勢力や不満分子の動揺とストックホルムを拠点にこれらの勢力へ支援を続けている明石元二郎大佐の謀報破壊工作のあらましを高野に説明した。

かつてドイツに留学しヨーロッパのことに明るい高野は、参謀次長の国際的な視野に立った戦略論をよく理解した。参謀次長は相手の反応を十分に確かめた上で本部が練りあげた極秘の作戦を高野へ伝達した。

旅順の情報収集にやっきになっていた参謀本部に明石大佐から耳寄りな報せがもたらされていた。

旅順の艦隊にソローキンという名のエスエルの秘密分子が潜入しており、かれは帝国ロシアを打倒し自分たちが理想とする人民政府を造るため日本軍への協力を申し出ているのだという。

旅順市街や港口それに要塞についての情報の有無が戦いの雌雄を決することになるという点では陸海軍の首脳たちの判断は一致している。そこで参謀本部は通常の戦闘行為の捕虜としてソローキンを捕らえる機会を待った。それは単に旅順の情報を得るだけでなく、表向き捕虜として明治政府の手に入れたソローキンを今度は明石工作の重要な謀報員として逆にロシアの心臓部へ送り込もうという作戦を参謀本部が練ったからである。

そこで高野所長の役割は松山収容所へ捕虜として受け入れたソローキンを逃亡事件と見せかけて無事に脱出させることであつた。

作戦はすでに密かに進行していた。

旅順港口に閉塞され身動きの取れなくなったロシアの太平洋第一艦隊はウラジオストックへの脱出を画策し、通報艦や運送船を使って何度もウラジオストックの艦隊との連絡を取ろうとしていた。参謀本部はソローキン少尉がこの任務を得てウラジオストックへ向かう時が来るのを今か今かと待っていたのである。

田村が話し終えたちょうどそのとき、城北練兵場の方から万歳を三唱する人声があがった。

高野は田村に従って俘虜収容所事務棟の二階にある所長室の窓から夕闇迫る練兵場を眺めた。大変な人出である。音楽隊を先頭に提灯を手にした長蛇の列が収容所の方へやってくる。音楽隊の奏でる九連城占領祝歌と、とおりを埋めた人たちの足音が大きな波になって二人の方へ押し寄せてきた。つかの間の勝利に酔いしれて歩く市民の列に目を落としながら、高野は待ち受ける任務の重大さに頬を紅潮させていた。

すでに書いたようにソローキンが明治政府の手に落ちたのはそれからおよそ一月後のことである。

ソローキンは明治政府の発行した「身分証明書」を密かに携行して松山収容所へ移送されてきた。それによるとソローキンはイギリスの商事会社の社員の肩書が与えられていた。証明書があれば国内のどこでも自由に船や鉄道で移動し、役所やホテルを利用することができた。

高野はソローキンの堂々とした体躯や洗練された物腰に好感を覚えた。高野がドイツ留学時代に交遊をもったユンカー出身の青年将校たちと共通した貴族出身者の雰囲気やソローキンは身につけていたのである。

ところで、高野はソローキンとじっくり話し合う場所の確保に苦心した。収容所内では他の捕虜の目があり、ソローキンとかれの任務にかかわるこみいった話をするのは困難だった。それに高野は英語があまり得意ではない。機密を要する密談には時間がかかった。いろいろ案じたすえに高野は松山女学校の隣りにある教会の一室を使用することにした。収容所で模範的な捕虜として散歩や買物、道後温泉への入浴などが許可されたソローキンは牧師に会うことを口実に教会に出入りすることになった。

高野が教会でソローキンと最初に密談したのは女学生たちの祥宗寺慰問の前日である。高野はこの日、ソローキンに対して十二月までにはヨーロッパへ渡り、明石大佐の直接の指揮下に入るようにという参謀本部の基本的な行動計画を伝達した。そして、ドイツ留学時代に知遇のあった明石大佐の人柄を不慣れな英語で紹介した。